

慶応義塾大学 理工学部 管理工学科

慶応義塾大学理工学部管理工学科は、故山内二郎教授を中心として、昭和34年に設立されました。管理工学という名称も今日ではごく一般的なものになりましたが、当時としてはまったく新しく、この名称をもつ学科としてはわが国で最初のもので、おりしも高度成長期を目前にした当時、複雑化された社会のさまざまなシステムを効率よく運営するための、システムの計画・設計・評価・管理に関する専門家の必要性を予見し、それを育成する学科として、設置されたものです。

以来当学科は、毎年120名程度の卒業生を送り出し、昭和61年4月現在その総数は、3412名（内修士605名）に至っています。また、学部の現在の在籍者数は、3年134名・4年155名、修士課程は1年34名・2年48名（内留学生13名）です。さらに、博士課程には、1年4名・2年2名・3年4名（内留学生3名）が在籍しています。海外からの留学生も多く、人数もまた国の数も年々増える傾向にあります。その内訳は現在、韓国から4名・台湾4名・タイ4名・中国2名・イラン1名・サウジアラビア1名となっています。

指導にあたる教員数は、教授7・助教授5・講師4・助手5の計21名で、明確な講座制をとっていませんが、各教員の専門分野は、およそ次のようになっており、大半がOR学会の会員です。

システム工学：林 喜男，行待武生，川島弘尚

IE：千住鎮雄，中村善太郎，川瀬武志，金沢 孝

経済：森 敬，西野寿一

経営管理：福川忠昭，高橋正子

統計：鷲尾泰俊，竹内寿一郎，飯田孝久

計算機：浦昭二，大駒誠一，永田守男，遠山元道

OR：柳井 浩，関根智明，小沢正典

学部学生の1・2年では、数理工学科の学生とともに“2系”に分類され、主として一般的な理工学部の基礎教育を受けますが、2年生になれば、管理工学概論や管理工学用実験等の管理工学科向けの授業もあります。専門教育は、3年になってからいよいよ本格的になります。3年生に対する必修の実験・演習としては、人間工学・システム工学，IE，経営管理，統計，計算機，ORの6つがあります。これらが、前期には週あたり1日半、

後期には週2日行なわれています。また、大学院においても、システム工学，経済・経営管理，計算機，統計・OR等，かなり範囲にわたる教育がなされています。

ORの演習では、PERT・MAX-FLOW・経済政策ゲーム・LP・待ち行列・輸送問題・シミュレーションの7つが、1回が半日で計9回行なわれています。授業としては、OR第1・第2・第3・第4の4科目がありますが、ほかの科目の授業でも、ORに関連したテーマが豊富に盛り込まれています。

管理工学科では、専門分野のみならず広い分野にわたっての教養を学生に身につけさせるよう指導しており、バラエティーに富んだカリキュラムから偏らずに学習するように、4年生でもとるべき単位数が指定されています。また、隣接分野とのコミュニケーションも特に重要視され、特に、修士論文の発表審査会においては、専門分野の違う教員にも容易に理解できるような発表技術が要求されます。このため、2月上旬の発表審査会が近くなると修士課程の2年生の目の色も変わり、発表の練習をする光景が方々で見かけられます。一方において、学生と教員との間の接触の機会を増やすため、学部2年・3年生に対しては、アドバイザー制度を設けています。この制度は、各教員が5～6人の学生のアドバイザーとなり、学生と一緒にコンパやハイキングなどを通じた、人間的な触れ合いによって、親睦を図るとともに管理工学に対する一層の理解を深めようとするものです。

また、卒業後の就職先での担当業務をみると、情報処理が35%、生産・品質管理が15%、営業マーケティングが17%、調査・企画が15%、人事・企画が5%、その他13%と多岐にわたっておりますが、個々にその活動をみれば管理工学の教育が十分にいかされているものと考えております。

以上が、管理工学科の概要ですが、進歩の激しい現代の社会にあっては、研究・教育面において、いかにしてその変化に対応すべきかが重要な問題です。当学科においては、教員間において常にこれが話題となり、5～6年に一度は、研究・教育面の見直しがなされています。現在もその時期にきており、活発な討論がなされています。（小沢正典）